

使徒的・福音的な実質が失われてしまった「温かな霊性」というものがあります。それはとても人気があるものです。それらは「非教義的」と呼ばれるキリスト教です。そうした意識がなくても、そうしたものとなっていることがあるのです。それは、特に一般信徒に深く入り込むキリスト教となっています。それは説教壇から語られることもありますし、またそうではない形で伝えられることもあります。そしてそれは教会を死に至らせるものです。「単なる霊性」と共にあるだけの教会は、ほとんど何もできない教会です。そうした霊性がもたらすのは「明確なもの」とは程遠いものです。

まず、キリスト教の啓示は、「神は霊である」というものではありません。従って、キリスト教という宗教は霊的なものではないのです。

また、キリスト教の啓示は、単に「神は愛である」というだけのものではありません。従って、キリスト教という宗教は単なる慈善活動を行うものではないのです。単なる慈善は「善」を水没させ「真理」を裏切る。そうしたことが多くあるのです。

キリスト教の啓示は、「霊的な神・人格的な神・愛の神は、聖なる神である」というものです。それ故にこそ、キリスト教の啓示は永遠なのです。それで、キリスト教がもたらす宗教は「聖なる御霊の宗教」ということになります。そこには「聖なる霊性」があるのです。

キリスト教の啓示・キリスト教の賜物には、特定の場と根源があります。それはキリストの十字架です。それは神の正義の裁き・聖なる恩恵・世界を飲み込み新たに作る創造の御業が、危機に瀕する場です。

神の究極の啓示は聖なるものです。そして、十字架の中心的な意味は、神の愛よりも、愛の聖性の内にこそ、豊かに湛（たた）えられているのです。

私たちの内には本来、神の内にある究極の事柄・神聖な事柄・永遠の事柄について、何の確かなことありません。つまり、神の聖性については、私たちは何も確かなものが言えないのです。ただ、十字架だけが私たちに与えられています。十字架だけが、「愛」を「神の愛」とするのです。それだけではありません。十字架だけが、「愛」を永遠に・絶対的に信頼に足るものとするのです。

人は年齢を重ねるごとに、以上の事柄を、いよいよはっきりと見て行くことになるのかもしれませんが——とりわけ、大海原の向こうにそびえる天国の丘の稜線をはっきりと確認できるような年齢になり、そこに響く豎琴の音色に耳を澄ますような年齢に至ると、そうした事は、はっきりと分かってくるものなのでしょう。つまり、私が言いたいことはこうなのです。キリスト教の中にある大いなる論点とは、「組織神学」や「正統」をめぐる事柄ではない、ということです。そうではなくて、「一つの身体（からだ）」を巡る闘いの中に、大いなる論争はあるのだ、ということです。

すべてを包含するキリストの賜物として、「一つの身体」があるのですが、その内奥（ないおう）に触れる力動の全てを巡って、キリスト教の議論すべき論点があるのです。キリスト教には、一般に知られた姿かたちがあります。それは十字架の啓示と切り離せません。その「姿かたち」を巡って、大いなる論争がある。その点についてしっかり理解できたなら、私たちは霊的な倦怠を脱することができるこ

とでしょう。実にこの倦怠によって、教会の中核部分は蝕まれて（むしばまれて）おり、教会は各方面への進歩の途中で足踏みを強いられることになっています。その惨めな状態を脱して初めて、私たちは教会を確保します。しかしそれは、実にただ一つの源泉——「贖罪の十字架」という創造的源泉——においてのみ起こる出来事なのです。この「十字架」を要請するのは、単なる「神の愛」だけではありません。実に「神の聖なる愛」が、この「贖罪の十字架」を求めています。「神の聖性」によって要請され、そして「神の愛」によって与えられるもの。それが「十字架」なのです。

代々の教会は、その基盤の上で、その命脈を保ちます。その基盤とは何でしょうか。それは「新約聖書の福音」です。「聖なる・審判の・救い出す十字架」です。その基盤には力があります。その力は、ただひたすら、代々の教会の受けるべき分となっています。

ですから、次のように言う事は、どんなに間違っているかは、明らかです。例えば「霊的であれ。そう知れば、どんなことを信じていても、大丈夫だ。」と言う人がいるのです。あるいは「良いことをせよ。そうしているうちは、何を信じようと、かまわない。」と言う人がいます。とんでもないことです。「代々の教会が存在意義を保持していること」がなければ、「聖なるものについての明確な神学を保持していること」も無くなります。そして、その逆も然り、なのです。

たとえば、教会が現実の場に居場所を失い、単なる「宗教的な団体」であるとか「宗教的な聴衆の集まり」になってしまうなら、そこにあったはずの「明確な信仰」は無視されるようになります。そして、世間に数多（あまた）広がっている魅力的なもの・共感すべきものに振り回されて、最後には人々から見捨てられることになるでしょう。

また反対に、「聖なるもの」についての神学や知識が無視されるようになると、愛想のよいだけですぐ消えて行く人のつながりの中に、代々の教会は沈み込んで行きます。そこにはもう、「神の御国」を真心から指し示すようなことは無くなります。「神の御座」を指し示す教会の威厳は、そこにはもう、消失してしまうのです。

代々の教会は、ただひたすら、福音の御言葉によって作られます。福音の御言葉こそ、教会を創出する源なのです。この御言葉は、普遍的なもの・最終的なものです。すべてはこの御言葉を目指しています。従って、「すべての魂・いのちは、代々の教会のためにある」ということになります。何故なら、すべての魂・いのちは「人との繋がり」を産み出すために存在しているからです。そして、それは「贖い助け救う神の御業」に向けて存在しています。だから、代々の教会は一つひとつの魂・いのちに対して、一定の権利を有しているのです。

すべてのクリスチャンが、人々の魂といのちを救い出す働きに呼びだされているわけではありません。しかし、クリスチャンは一人ひとり、代々の教会の生き生きとしたメンバーであるはずなのです。そして、代々の教会は、魂といのちの救いをその大いなる任務としています。

もちろん、私たちは「社会改良」ということに興味を持っているでしょう。そして、当然ながら、私

たちが代々の教会の生き生きとしたメンバーであることが、「社会改良」に大きく寄与すると思います。しかし、それだけではないのです。問題は、社会が根本的に何を必要としているか、ということにかかっています。社会が根本的に必要としていること、それは「救い」です。まさにこの「救い」こそ、代々の教会がすべての人に提供しているものです。代々の教会だけが、「救い」についての秘密を有しています。代々の教会とは、人類が過去に生み出した最高のものです。そして代々の教会とは、人類の未来が委ねられた唯一のものなのです。

代々の教会は、人々の繋がりでできています。そこに、人々の繋がりについての秘密があります。ですから、あるいは不思議に思う向きもあるかもしれません。つまり、なぜ、そのような「代々の教会」が、社会における少数派なのか、ということです。実際、代々の教会は今も無視されています。過去に、そして今も、教会には錯誤と破れがあります。そのことを忘れてはいけません。しかし、そのこと上でお、私たちは次のことを思い出すようにしましょう。

1.

そもそも、代々の教会は歴史の中に働いているのです。このことを思い出すようにしましょう。教会は数々の横領・使い込みをしてきました。しかしそれでも、その力と祝福は、残されています。不滅の「レムナント（残された者）」はどんな時代にも残されています。その人々は、大多数の人々が奉じている原理によって圧迫されますが、その恐ろしい圧力をかいくぐって生き残り、歴史を通じて勝利しています。そこには「選びの原理」があります。「ほとんどいない」と思われるような選ばれた民のために、大勢の人々が存在しているという原理です。

政治というものは、必ず、多数者によって動きます。しかし、宗教というものは少数者・選民によって動いたときに、最も力強いものとなるのです。代々の教会と国家・政府というものは、実に違っているものですが、まさにここにおいて、その違いは根本的なものとして確認されます。

2.

その上で、究極のことを考えてみて下さい。究極において、真の意味での「代々の教会」は、物事を成り立たせている力動のなかで、圧倒的多数を占めているのではないのでしょうか。というのも、天と地にある代々の教会を、神は「御前にあるひとつのもの」と見ておられるからです。天と地に分かれているように見える代々の教会は、実は、有機的に一つにつながっているのです。目に見えない天の教会は、いつも私たちを助けに来てくれます。私たちは死者たちと共にいるのです。「多数派」と呼ばれるべきは、他でもない、私たちです。実際、神様の前に今を生きる人々には、目に見える人々と、目に見えない人々の両方がいます。その両方の人々は、地上に生きる私たちの周囲の群がる神の敵を凌駕しています。

3.

そして、人数を考えるなら、何よりも「キリスト」ご自身を数に加えなければなりません。戦場においてナポレオン一人の存在は5万人の兵隊を凌駕しました。今、代々の教会の立つ場所で、キリストお一人の存在する重みを考えて下さい。そこには全人類の数を足し合わせた以上の重みがあるのではないのでしょうか。

4.

結論として、こう言えるでしょう。「代々の教会だけが、この地上において、すでに戦いに勝利している」と。この地上の戦いは、キリストがなしてくださったことにより、勝利で終わっています。私たちはその勝利の跡を辿るばかりなのです。そのことを証明することこそ、代々の教会が存在する主たる理由なのです。

ここにもまた、代々の教会と国家・政府との違いが見て取れます。

国家・政府というものは、歴史を通して、いのちと自由の確保を目指し、ただひたすらに「勝利するべく」働くばかりです。代々の教会は、すでに一度完全に確保された自由をつかみ取るために働きます。

国家・政府というものは過去の遺産の上に未来を築きます。代々の教会は、過去にもたらされた究極的な福音の内にある信託状を手に入れているのです。この信託状は改ざんされることのないものです。この信託状が、代々の教会の全体を形作り、色づけて、なすべきことは何かを指し示すのです。

5.

以上から言えることは、次のことです。まず、代々の教会だけが、この世界の外側に支点を有する唯一のものである、ということ。このような人の繋がりには他にありえません。そして、それ故に、代々の教会だけが、この世界を全体として動かすことができる、ということ。教会は、それが本物であれば、すべて一つひとつ、その背後に「本物の代々の教会」を有し、唯一無比の完全な救いを有しているのです。その救いには「福音という普遍性」の全てが伴います。

救いは代々の教会の背後にあります。それは教会の福音の内にあります。そこには「普遍的な立場（カトリシズム）」の力があります。それは代々の教会とは全く関係ないものだ、とする立場もあるでしょう。しかし、まさにそれこそ、命を得させる力をもったものだ、と見ることもできるのです。